

魚玄機の詩と詩作

— 模倣から創造への試み —

横 田 むつみ

はじめに

魚玄機（八四四？～八六八年^①）の伝記資料のうち最も古いものは唐の皇甫枚『三水小牘』で、その後もほぼそれを襲う形で数種の伝記が編まれた^②。その記述には多少の差異はあるが、概要は、「魚玄機、字は幼微（または蕙蘭）。李億の侍妾となるも離別して、咸宜観の女道士となる。嫉妬により下女を殺害したために若くして刑死した」というものである。魚玄機が詠出した現存詩は五十首^③で、唐代女性詩人のなかでは薛濤の八十九首に次いで多い。五十首のうち約半数は恋情を主題とするものであるが、それ以外の詩の主題は多様である。同じ唐代の女道士の李冶（七〇九？～七八四年^④）や宮妓の薛濤（七七〇？～八三二年^⑤）の詩も大半は恋情を主題としたものであり、それ以外は贈答詩や応酬詩のように他者に寄せたものであるが、魚玄機の詩は題詠詩・詠史詩・悼亡詩等と男性詩人と比肩できるほどに多種多様であり、専ら男性が詠うものであった悼亡詩や閨怨詩までも詠出している。詩の形式について見ると、李冶や薛濤にはない五言や七言の排律の詩が数多くあることが特徴的である。

魚玄機の詩に対する評価は時代の推移と共に変化が見られる。儒家的倫理観が強く影響を及ぼした時代には、「淫

蕩である」と良い評価は得られなかった。近年の研究においては、陳文華氏は、「言葉や韻律の美しさを求めて、字句を一字一字練ることに巧みである」と修辭上の力量を評価している。小林徹行氏は、「官吏たちが科擧のために学んだ近体詩によつて、故意に、相手を威圧するような直接表現で詠う処にこの詩人の性格があり、またそれが他に類を見ない文学を創造することになった」と表現の特異さに注目して評価している。一方、川合康三氏は、「彼女が使う言葉、表現の器、すべてが本来士大夫の専有物だったのです。そうした『他者』の道具を借りて自分を表現するかすべがない哀しさ。しかも彼女の恋はあえていえば職業としての恋であったのかもしれない。とすれば、彼女自身の思いと詩のなかの恋情との間にも隔たりがある」と、士大夫からの借りものを使つての詩作であるために、魚玄機の思いと詠じた詩には懸隔があることを指摘している。

このように魚玄機の詩に対する評価は決して一様ではない。そこで小論では、まず魚玄機が詠出した詩のなかで最も多い恋情の詩と、それまでは専ら男性が詠うものであつたにも拘らず魚玄機が詠出している、悼亡の詩と閨怨の詩を取り挙げて、それらの詩から魚玄機特有の詩の詠み方を探りたいと考えた。そして、男性詩人並みの多様な主題で、悼亡詩や閨怨詩までも詠んだり、科擧の詩帖詩となつた排律で多くの詩を詠んだりと、他の女性詩人では見られない独自の詩作への試みの意図は何であつたのか追究したいと考えた。更には、男性であつたなら仕官のためや士大夫の教養として詠む詩を魚玄機はどのように捉えて、どのように詠んでいるのか、魚玄機にとつての詩作とはどのような意味を有していたのかについて考察を試みたいと考えた。

一 恋情を詠う

元來恋情はどのように詠われてきたのだろうか。最も古くは『詩経』の国風に民間歌謡として恋のうたが謡われていたことが見えるが、その後は民歌や楽府の形式でも詠われ続ける一方、士大夫の詩においては閨怨詩や宮怨詩とい

う限られたジャンルでしか詠われることはなかった。士大夫は恋情を詠うことを敬遠した。恋情という私的な事柄を詠うことは真情を吐露することになり、それは伝統的な儒家的詩観に背馳すると考えていたからである。したがって、士大夫は楽府や閨怨詩・宮怨詩という形式で、女性の視点あるいは第三者の視点で詠うという手法をとってきた。そのような制約のあった恋情の詩を魚玄機はどのように詠っているのか。魚玄機が恋人の李億（字は子安）に寄せた恋情の詩のうちの一首、「情書李子安に寄す」から見てみよう。

情書寄李子安

情書李子安に寄す

飲冰食藥志無功 晉水壺關在夢中

冰を飲むも藥を食らふも 志功無し 晉水壺關 夢中に在り

秦鏡欲分愁墮鵲 舜琴將弄怨飛鴻

秦鏡分かたんと欲するも墮鵲を愁ひ 舜琴將に弄せんとするも飛鴻を怨む

井邊桐葉鳴秋雨 窗下銀燈暗曉風

井辺の桐葉 秋雨に鳴り 窓下の銀灯 曉風に暗し

書信茫茫何處問 持竿盡日碧江空

書信茫茫 何處にか問はん 竿を持つこと尽日なるも 碧江空し

冷たい水を飲み藥を食べるような苦しい思いをして熱い恋心を堪え忍んでも、思いは報われません、夢の中でも晋水や壺関山をさ迷い喘ぐのです。愛の証の鏡を分かち合いたいが、もし裏切りを知らせる鵲が飛んで来たらと案じられるし、五絃の琴を爪弾こうとするも、鴻は遠くへ飛び去って別れになってしまいう。井戸端の桐の葉は秋雨に打たれて音を立て、窓辺の灯火は夜明けの風に吹かれて消え入りそう。あなたからの便りはいったい何処にあるの、釣竿を手に日がな一日、竿を手に腹中に便りを忍ばせた魚を探すかのように待ち続けているが、目に映るのはただ碧い江の流れだけ。

詩を寄せた相手の子安については、伝記資料等には一切記載はなく、詠出した詩も遺されていないことから詳細については不明であるが、『北夢瑣言』の魚玄機に関する条には「咸通中、李億補闕の為に箕掃を執る。後に愛衰へて山を下り、咸宜観に隸して女道士と為る」とあることから、この詩が詠まれたのは魚玄機が咸宜観の女道士になる前であると考えられる。従ってこの詩は魚玄機の初期の作品である。

「氷を飲み薬を食らふ」は清貧に堪える決まり文句。白居易詩「三年為刺史」にも「三年刺史と為り、氷を飲み復た薬を食らふ」とある。ここでは子安への恋心を抑えようと堪え忍んでいることをいう。「晋水」、「壺関（山）」は山西省にある険阻な山河を代表する地名。「秦鏡」とは秦の始皇帝が持っていたという故事（『西京雜記』）から心の奥底を照らし見せる鏡のこと。「墮鵲」は、昔、夫婦が別々に持っていた鏡があり、ある時、妻が他の男と密通すると、その鏡が鵲となって夫の許に飛んで行ったことから夫はその事を知った、それから後人は鏡の裏面に鵲を彫るようになったという故事（『神異經』）を、「舜琴」は舜が五弦の琴を作り南風の歌を歌った（『禮記』）を典故にしている。更に嵇康の「贈秀才入軍」にある「目は帰鴻を送り、手は五絃を揮ふ」の句も踏まえている。「秦鏡」、「墮鵲」、「舜琴」、更には白居易の詩と嵇康の詩と、畳み掛けるように多くの典故や関連詩を駆使して詠まれている。

また頷聯と頸聯を見ると、頷聯では「秦鏡」と「舜琴」、「欲分」と「將弄」、それに「愁墮鵲」と「怨飛鴻」、並びに頸聯では「井邊」と「窗下」、「桐葉」と「銀燈」、それに「鳴秋雨」と「暗曉風」というように、それぞれの語句の対比が明確で対句が鮮やかに整っている。この詩には女道士としての固有の詩情は詠われておらず、典故や対句といった修辞上の工夫に力点を置いた形跡が顕著に見られる。このような傾向は、「春情寄子安」、「隔漢江寄子安」等の子安に寄せた初期の作品に特に多く見られる。川合氏が「魚玄機の詩作は使う言葉、表現の器、すべてが本来士大夫の専有物であった。そうした士大夫の道具を借りて自分を表現している」と指摘しているのは、このような魚玄機の詩の特性を言っているのではないか。「使う言葉」つまり士大夫が詩作に使う詩句や、「表現の器」つまり典故や対句表現等といった士大夫の詩作の技法に倣うあまりに、魚玄機自身の思いと詠出した恋情表現との間に隔たりが生じていると感ぜられるのである。

次の「送別」は、詩題からは送別詩のようにも解釈できるが、詩の内容からは愛の喪失を嘆く恋情の詩と考えてよいだろう。

送別

送別

秦樓幾夜愜心期 不料仙郎有別離 秦樓 幾夜か 愜心を期せしも 料らざりき 仙郎 別離有らんとは
睡覺莫言雲去處 殘燈一盞野蛾飛 睡り覚めて言ふ莫れ 雲去りし処 殘燈一盞 野蛾飛ぶ

あの簫史と弄玉のようにこの高殿で、幾夜も思いのままに契りを結んだことだろう、ところが思いも寄らずあなたとの別れがあるなんて。眠りから覚めても問わないでおくれ、雲のように去っていく私の行先なんか、油皿の残り火の上では野蛾が身を焦がして飛び回っている。

「秦樓」は、春秋時代の秦の笛の名手であった簫史と穆公の娘の弄玉が住まう処、ここでは妓女の居る高殿のこと。「愜心を期す」とは思いのままに契りを結ぶこと。「仙郎」とは仙人の若者、ここではこの詩に詠まれている恋人のこと。秦の弄玉と簫史の仲睦まじい男女の故事（『列仙傳』）と、巫山雲雨の故事を踏まえて詠んでいる。この二つの故事は男性詩人の詩の典故によく使われるものである。「殘燈一盞、野蛾飛ぶ」は、残り火が煙る油皿の上を無心に飛び回り、やがてその身も焼き尽くす野蛾を未練を断ち切ろうとする女の哀れな情念の象徴として詠んでいる。愛の喪失を怨み嘆く女を殘燈の上を飛び回る野蛾に見立てるという意表を突く斬新な表現である。この詩には魚玄機の詩作に女性の内面に即した繊細さも感じられるが、それでもなお士大夫の詩への接近の意図が見られる。なぜ魚玄機はこのような士大夫の詩作に倣おうとしたのか。それを探るために、魚玄機が詠っている悼亡詩と閨怨詩についても併せて見てみたい。

二 悼亡、閨怨を詠う

専ら男性が詠うものであった夫が亡妻を悼んで詠う悼亡詩や、男性が空閨を守る思婦の視点で詠っていた閨怨詩を魚玄機はどのように詠っているのだろうか。魚玄機の悼亡詩と閨怨詩を見てみよう。

代人悼亡

人に代はって悼亡す

曾睹天桃想玉姿 帶風楊柳認蛾眉 曾て天桃を睹ては 玉姿を想ひ 風を帯ぶる楊柳に 蛾眉を認む

珠歸龍窟知誰見 鏡在鸞飛話向誰 珠龍窟に歸る 誰か見るを知らん 鏡に鸞の飛ぶ在り 誰に向かつてか話さん

從此夢悲煙雨夜 不堪吟苦寂寥時 此より夢に悲しまん 煙雨の夜 吟苦に堪へざらん 寂寥の時

西山日落東山月 恨想無因有了期 西山には日落ち 東山には月 恨想す 了期有るに因無きを

昔は瑞々しい桃を見てはお前の美しい容姿を思い、風に揺れる柳を見てはお前の眉のようだと思っていた、そのお前はあの珠のように龍の窟に帰ってしまった、もう誰も見に行くことはかなわない。鏡にも鸞の飛ぶ姿が映るだけでお前の姿はもう見えない、誰に向かつて話し掛けたらよいのだろうか。これからは雨の煙るような夜にはお前の夢をみては悲しみにくれることだろう、寂しさ極まる時には詩を吟ずることも儘ならなくなることだろう。西の山に日が沈み、東の山から月が昇って日々は過ぎていっても、お前を失った悲しみはいつ終わるともななく続くだろう。

「珠龍窟に歸る、誰か見るを知らん」は、龍の棲む深い淵から千金の値打のある珠を取ってきた男の故事（『莊子』¹⁹）から、その千金の珠のように大切な妻は亡くなってしまい、もう二度と見ることはできないということを言っている。「鏡に鸞の飛ぶ在り、誰に向かつてか話さん」は、三年も鳴かなかった鸞鳥に鏡を懸けて映すと、その影を見て仲間と違って悲鳴して絶えたという故事（『異苑』²⁰）を用いて、亡き妻の姿を追い求める様子を鸞鳥に擬えて詠んでいる。「天桃」のような「玉姿」、「風を帯ぶる楊柳」のような「蛾眉」と美しく形容される生前の妻、その妻のことを回想しているうちに妻はもういないことを実感する、そしてその寂しさを嘆き、この悲しみに終わりはないと結んでいる。これは悼亡詩の嚆矢となつた潘岳の「悼亡詩」を意識した構成で詠われている。²¹次に挙げるのは、空閨を守る思婦の情を詠つた閨怨詩である。

閨怨

靡蕪盈手泣斜暉 聞道鄰家夫婿歸

閨怨

靡蕪手に盈つるも 斜暉に泣く 聞道 隣家 夫婦歸ると

別日南鴻纒北去 今朝北雁又南飛 別れし日 南鴻纒かに北去し 今朝 北雁又た南飛す

春來秋去相思在 秋去春來信息稀 春來り秋去るも 相思在り 秋去り春來るも 信息稀なり

肩閉朱門人不到 砧聲何事透羅幃 肩閉ぢ 朱門には人到らざるに 砧声 何事ぞ 羅幃を透す

(古詩に詠まれている離縁された女のように) 靡蕪を手をいっぱい摘んだのに、(その女のように)は愛しい人に(会えずに) 夕日を背に泣いている、それなのに隣の家では夫が帰って来たと聞く。愛しい人と別れたのは、南に飛来していた 鴻おとりがちようど北へ帰って行ったばかりだったのに、今朝には北に飛来していた雁がまた南へ飛んで戻って来た。春が来て秋が過ぎても恋しく思い続けている、そして秋が過ぎてまた春がやって来る。だろ
うが、愛しい人からの便りはなかなか来ない。門を閉めてただ待っているが門にはだれもやって来ないので、
なんとしたことか砧の音だけが寢室の帷の奥まで聞こえて私を悲しませる。

「靡蕪手に盈つるも暉に泣く」は、古詩「山に上りて靡蕪を採り、山より下りて故夫に逢ふ」の一節から、「私も靡蕪を手をいっぱい摘んだのに、その女のようにには愛しい人に会えずに夕日を背に泣いている」と、詩の主人公が愛しい人と会えないでいることを詠い起こしている。この魚玄機の詩は、渡り鳥の雁の往来によって二人が会えないでいる時の経過を表したり、砧声という征夫を連想させる詩語を用いるなど、男性作者の伝統的な閨怨詩によく見られる詠い方である。女性である魚玄機は、そのまま自己の視点で描けば一人称的女性像となるはずの女性を詠んだ閨怨詩でも、このように男性詩人に模して男性詩人の視点での女性描写の手法をとっている。悼亡詩においても閨怨詩においても、男性詩人の詩作に倣うことに腐心している様子が窺える。

三 詩作の模倣

なぜ魚玄機はこのように恋情の詩ばかりでなく、悼亡詩や閨怨詩までも男性詩人に倣おうとしたのであろうか。そ

の答えを女性と詩作との関係から考えてみたい。「歌詞を縦にする莫れ、他の淫語を恐るればなり」(『女論語』訓男女章第八)と言われて、女性が公に詩を詠むことが蚊帳の外に置かれた時代は長い。では女性が詩を詠み始めたのはいつからであろうか。『詩経』等の民間歌謡を除いて、詩の作者に女性の名前が見えるのは漢代からである。その漢代における女性詩人と言えば、出自によって二つの女性群に分けられる。一群は、烏孫公主、班婕妤といった后妃や公主等の宮廷の女性詩人である。あとの一群は、蔡琰(蔡邕の娘)、徐淑(秦嘉の妻)といった著名な文人の娘や妻や妹等の名媛と言われる女性詩人である。このように女性詩人層が宮廷の女性と名媛に限られていたのは、漢代から魏晋南北朝を経て唐代の始めまで続く。ところが唐代半ば過ぎの安史の乱以降頃から、女性詩人層に大きな変化が生じる。色街や道観等の妓女や女道士のなかから、詩文を能くする女性が輩出するようになる。魚玄機もそのひとりである。

后妃や公主といった宮廷の女性詩人のなかには、身分に相応しい教養を身に付けて宮廷詩壇の一員として詩を詠む機会を得て、詩を詠むことよって天子を支える役割を果たしたと考えられる女性もいた。²⁾一方著名な文人の妻や妹といった名媛は、文人である夫や兄のように文才を発揮して詩を詠んで、その詩才が認められたと考えられる。³⁾では唐代中頃から活躍が見られる妓女や女道士は、どのようにして詩作の術を身に付けて、どのような場で詩を詠み、どのようにして詩作の腕を磨いていったのであろうか。后妃や公主のように宮廷詩壇という用意された詩を詠む場もなく、宮廷の女性や名媛のように詩作の技法を導く者が身近にいない妓女や女道士にとっては、宴席や妓館、及び道観等での士大夫との出会いが詩を詠む場となり、士大夫から詩作の技法の手解きを受けたのではないだろうか。あるいは見様見真似で習得したのかも知れない。いずれにしろ詩を詠んでいた士大夫の傍らにいた妓女や女道士にとつては、彼等の詩作からの影響は大きかったはずだ。

では妓女と士大夫はどのようにして出会ったのか。その出会いは、科挙の受験に際しての酒宴に始まり、官に就いてからも宴席等で接触は続いた。それは隋代に始まった科挙制度が唐代に至って浸透していくにしたがつて盛んに

なった。そしてその宴席では、妓女が歌舞で興を添えたり、酒令と呼ばれる様々な遊びが行われて詩が詠まれることもしばしばあった。そのようにして妓女と士大夫は出会う機会を得て詩を詠み、詩の贈答をするようになる。そうなるとその相手をする妓女に求められたのは、士大夫が詠んだ詩を理解したり実際に創作する能力であり、秀でた技芸と高雅で機知に富んだ対話ができる才知であった。ここに士大夫と妓女の双方が求めるものの授受の関係が成立したことにより二者の結び付きが深まり、妓女の地位も高まっていったと考えられる。

これに関連して諸田龍美氏は、「中唐期には、科挙制度が比較的公正に運用されたことで、白居易や元稹のような中下級官吏の子弟であっても、実力と運さえあれば、宰相の地位に就くことさえ夢ではない状況が生まれていた。科挙の進士科に合格するのは毎年三十名足らずであったとは言え、彼らを頂点として、小規模ながらも『階級移動社会』が実現していたのである」と当時の社会構造の変化を分析している。そして、統治階層が旧来の門閥出身者で占められていた安史の乱以前の「階級固定社会」から、社会的地位が個人の実力によって決定される「階級移動社会」への変化によって、個人の内なる精神が重視されるようになって平等観念が強まり、恋愛観や女性観にも大きな影響を与えて、士大夫と妓女という地位や身分の差を超えての共感も生まれたことを諸田氏は続けて述べている。^⑧つまり、中唐期に成立した「階級移動社会」においては、このような平等の観念が、ともすると卑賤な身と考えられがちな妓女や女道士に対しても浸透していくことによって、彼女達と士大夫との出会いや交際が容易になって、交流も密なものになっていったのである。そして妓館や宴席、道観等で士大夫と出会う詩を詠むようになり、時には恋愛感情も生まれて恋の詩を詠い始めるようになったと考えられる。このようにして宴席や道観等で士大夫と出会った妓女や女道士は、詩作を士大夫に倣い、士大夫の詠出した詩のよき理解者ともなって、共に詩を詠むようになったと考える。魚玄機詩五十首の成立年を特定することは困難な場合が多いが、先述した「情書寄李子安」を始めとする初期の作品には、士大夫の詩作に倣ったような典故や修辭上の技法が特に多く見られる。そしてその後の魚玄機の詩や詩作からは、模倣から新たな詩の創造に向かう様子が窺えるようになる。

四 模倣から創造へ

魚玄機が詠出した詩には詩を詠むという営みが実に多く詠まれている。例えば「期友人阻雨不至」の詩には、「郷思悲秋の客、愁吟す五字の詩」(第七、第八句)とある。「郷思悲秋の客」とは作者自らのことであり、故郷が偲ばれる秋夜にも苦吟している姿が詠まれている。また「寄劉尚書」には、「筆硯行くに手に随ひ、詩書坐するに身を遶る。小才も多く顧眄し、魚を食らふ人と作るを得」(第九、第十二句)とあり、詩中の「小才」とは自称であることから、魚玄機自らのことを詠んでいると解せる。この詩においても行く先々まで手には筆と硯を持ち、身の回りには詩書を置いて詩作に励んでいる様子が詠まれている。更にその身の回りに置いてある書物については、「導懐」に「臥床書冊遍く、半酔起つて梳頭す」(第十五、第十六句)と、寢床には書物が山積みになっていて、少々酔ったときには起き上がつてそこで髪を梳るとある。そして「夏日山居」には「綺羅長に擁す乱書堆」(第六句)とあり、美しい着物がいつも乱雑に積み上げられた書物を被っていることが詠まれている。美しい着物の掛かった傍らで詩作に没頭している、この詩中の女性からは魚玄機の姿が想像される。

更に関連して特筆すべき点は、魚玄機は五言排律と七言排律という形式で五十首のうち六首も詠んでいるという点である。初唐期には科挙の進士の試験にも詩と賦の韻文が加えられて、五言六韻もしくはそれ以上の長さの排律が試帖詩として試験科目になった。魚玄機はその試帖詩となった排律にも挑戦しているのである。そんな魚玄機には、晴れ渡つた春のある日に、長安の朱雀街東の新昌坊内にある崇真観の南楼での光景を詠んだ詩がある。

遊崇真観南樓曙新及第題名處

崇真観の南樓に遊び 新及第の題名の処を睹る

雲峰滿目放春晴

歴歴銀鈎指下生

雲峰滿目

春晴を放つ

歴歴たる銀鈎

指下に生ず

自恨羅衣掩詩句

舉頭空羨榜中名

自ら恨む

羅衣の詩句を掩ふを

頭を擧げて空しく羨む

榜中の名

見渡すかぎりの雲の峰、晴れ渡つた春の明るい日差しのなかに、進士の試験に及第した人の名前がくつきりと

書き付けられていく。自分が女であることが悔しくてならない、女の私がいくら詩を詠んだところで何の役に立つというのか、立て札に書かれた名前を只々羨ましく見上げている。

「羅衣詩句を掩ふ」の「羅衣」とは女性の着物であることが多いことから、ここでは「羅衣」を女性の象徴として用いて、女性であるがゆえに詩を詠んだところで男性のように科挙を受けることもできない悔しさ詠っている。晴れ渡った春光を浴びて、立て札には及第者の名前が目眩しいほどにくっきりと書き付けられていく。それを前にして慨然としてただ見上げている女性。魚玄機はこの詩中の女性に自分を投影しているのであろう。魚玄機の詩は当時から文人達に持て囃されていたと伝えられていることから、詩作には自信を持っていたことだろう。また詩を詠む営みが多く詠まれている魚玄機の詩からは、日々詩作に励む姿が彷彿される。このような魚玄機にとつての詩作とは、自らの存在を確認し、更なる可能性に挑戦するという営為でもあったのではないか。しかしながら現実には直面したのは、女であるがゆえに科挙に挑むこともできず、ましてや及第者として名前を書き連ねられることなど叶わないという現実であり、決して越えることができない男女の壁であった。そのような現実に対する無念の思いがこの詩からは読み取れる。ここに士大夫の詩の模倣から始まり、やがて女性詩人魚玄機としての独自の詩の創造へと向かう試みを進めて、男性に伍して詩を詠むようになった魚玄機の葛藤が表れている。

このように詩作に励んで種々の詩を詠出し、その詩に文人達の関心が集まっていた魚玄機にとつての詩とはどのようなものであったのか。魚玄機は詩をどのように捉えていたのだろうか。妓女や女道士の詩は恋心を詠って男性に寄せたものが多い。ただし薛濤の場合は宮妓という立場上からか、恋心を伝えるというよりも、関わりのある士大夫等への挨拶や札状といった社交上のコミュニケーションの手段のように詠まれているものが多い。魚玄機の場合はどうであったのか。魚玄機の恋の詩には典故や対句等の修辞に重きを置いたものが多い一方、奇抜で斬新な表現も特徴的であり、詩のジャンルも他の女性詩人では類を見ないほどに豊富で、科挙の詩帖詩にもなった排律でも多くの詩を詠んでいる。このような魚玄機にとつての詩とは、恋心を伝えたり、社交上のコミュニケーションの手段としての

のといふよりも、他者の目に触れて評価されることを意識して詠んだ詩作品という意味合いが強くなっているように考えられる。それは安史の乱という未曾有の叛乱による社会の変化を契機に、妓女や女道士と士大夫との繋がりになり、彼女達の存在が士大夫はもとより社会で認められるようになるにしたがつて、その詩に注目が集まるようになったことにより、魚玄機の詩作の意識も模倣から創造へと高まったからではないだろうか。

おわりに

魚玄機の詩と詩作からは、士大夫の詩の模倣から始まり、次第に魚玄機独自の詩の創造へと向かう試みが窺える。そしてその作品のなかには、男性中心の社会で、女性が詩を詠むことの苦悩と葛藤を映し出したものもある。それは中唐以降の社会の変化を背景とした新しい女性詩人の姿であり、従来の女性詩人の作には見られないものである。

このような魚玄機にとって詩を詠むということは、身近な日常生活のなかで営む行為ではあったが、自らの詩作の更なる可能性に挑み、自らの存在を示す行為でもあったのではないか。しかしながら、それは同時に、どんなに詩才があるとしても、如何に詩作に励もうとも、女性であるが故に決して男性に並ぶことはできないという現実を時に思い知らされるということでもあった。ここに女性ながらに男性に伍して詩を詠み始めた、唐代の女性詩人魚玄機の詩作における奮闘と挫折の一端が垣間見られる。

注

(1) 魚玄機の卒年については、『三水小牘』の「下女を殺害したのは咸通戊年、春正月。その秋に刑死」というほぼ定説となっている説に従っている。諸説ある生年については、『唐女詩人集三種』の「八四四年（會昌四年）」説を採っているが、論拠に乏しいため疑問符を附した。

(2) 唐・皇甫枚『三水小牘』は咸通九年（八六八年）頃に成立。『三水小牘』以降に編纂されたものとしては、『北夢瑣言』、『續談助』、『太平廣記』、『南部新書』、『唐詩紀事』、『唐才子傳』等がある。

(3) 魚玄機の別集である『唐女郎魚玄機詩』（宋臨安府陳宅書籍鋪刻本影印）には四十九首が所収されており、『文苑英華』巻二〇八には「折楊柳」が魚玄機詩として所収されていることから、現存詩は五十首とした。

(4) 李冶の生卒年は、『聞一多全集』（武漢・湖北人民出版社、一九九三年）「唐詩大系」には「七〇九〜七八〇？年」とあり、傅璇琮主編『唐才子傳校箋』（北京・中華書局出版、一九八七年）「李季蘭」には「卒年七八四年」とある。そこで生年は聞一多説の七〇九年とし、卒年は傅璇琮説の七八四年とすると、「七〇九年〜七八四年」ということになるが、聞一多説にはその論拠が示されていないので生年に疑問符を附した。

(5) 斎藤茂『妓女と中国文人』（東方書店、二〇〇〇年）には、「妓女はその所属する場所によって、おおむね宮妓、營妓、官妓、家妓、民妓の五種に分けられて呼ばれることが多い。…（中略）…營妓は軍營の管理下に置かれた妓女で、主として將士やそこに所属する官僚の享樂に供せられた（一四〜二〇頁）とある。

(6) 薛濤の生卒年については諸説があるが、傅璇琮主編『唐才子傳校箋』（中華書局、一九八七年）では、それらの諸説を考察して「濤之生年乃大曆五年（七七〇年）、卒于大和六年（八三二年）、享年六十三歳」としている。小論はこの説を採っているが、生年の論拠については確証が示されていないので疑問符を附した。

(7) 明・胡震亨『唐音癸籤』巻八に「李冶、魚玄機、薛濤、女徳正同。…（中略）…魚最淫蕩。詩體亦靡弱。…」とある。

(8) 陳文華『唐女詩人集三種』（上海古籍出版、一九八四年）前言 三二 一三頁。

(9) 小林徹行「魚玄機の詩の特質」（『東洋文化』復刊六九、一九九二年）二五頁。

(10) 川合康三「中国の恋のうた「詩経」から李商隱まで」（岩波書店、二〇一一年）一三九頁。

(11) 考察にあたり底本としたのは、魚玄機詩は『唐女郎魚玄機詩』（宋臨安府陳宅書籍鋪刻本影印）、李冶詩は『全唐詩』巻八〇五、薛濤詩は『薛濤詩』（明萬曆洗墨池本）である。参照したのは、『唐人選唐詩十種』（上海古籍出版社、一九五八年）、

『萬首唐人絶句』(一九七八)一九七九年姑蘇陳敬學德星堂校刊本)等。

- (12) 北宋・孫光憲撰『北夢瑣言』卷九に、「唐女道士魚玄機、字蕙蘭。甚有才。咸通中、為李億補闕執箕掃。後愛衰下山、隸咸宜觀為女道士」とある。

- (13) 白居易「三年為刺史二首」其二(『全唐詩』卷四三二所収)。

- (14) 『太平廣記』秦寶に引く『西京雜記』に、「有方鏡、廣四尺、高五尺九寸、表裏洞明。人直來照之、影則倒見、以手掩心而來、即見腸胃五臟。歷歷無礙。人有疾病在內者、則掩心而照之、必知病之所在。又女子有邪心、則膽張心動。秦始皇帝常以照宮人、膽張心動、則殺之也。高祖悉封閉、以待項羽。羽並將以東。後不知所在。出西京雜記」とある。

- (15) 『太平御覽』鏡に引く『神異經』に、「昔有夫妻將別、破鏡、人執半以為信。其妻與人通、其鏡化鵲飛至夫前、其夫乃知之。後人因鑄鏡為鵲安背上、自此始也」とある。

- (16) 『禮記』樂記に、「昔者、舜作五弦之琴、以歌南風、夔始制樂、以賞諸侯」とある。

- (17) 嵇康「贈秀才入軍五首」其四(『文選』卷二四所収)。

- (18) 『列仙傳』蕭史に、「蕭史者、秦穆公時人也。善吹簫、能致孔雀白鶴於庭。穆公有女、字弄玉、好之、公遂以女妻焉。日教弄玉作鳳鳴、居數年、吹似鳳聲、鳳凰來止其屋。公為作鳳台、夫婦止其上、不下數年。一旦、皆隨鳳凰飛去」とある。

- (19) 『莊子』列禦寇に、「人有見宋王者、錫車十乘、以其十乘驕釋莊子。莊子曰、河上有家貧恃緯蕭而食者、其子沒於淵、得千金之珠。其父謂其子曰、取石來鍛之、夫千金之珠、必在九重之淵而驪龍頷下。子能得珠者、必遭其睡也」とある。

- (20) 『異苑』卷三に、「罽賓國王買得一鸞、欲其鳴不可、致飾金繁、饗珍羞、對之愈戚、三年不鳴。夫人曰、嘗聞鸞見類則鳴、何不懸鏡照之。王從其言、鸞睹影悲鳴、冲霄一奮而絶」とある。

- (21) 晋・潘岳「悼亡詩三首」其一「荏苒冬春謝、寒暑忽流易。之子歸窮泉、重壤永幽隔。私懷誰克從、淹留亦何益。僮儻恭朝命、迴心反初役。望廬思其人、入室想所歷。幃屏無髣髴、翰墨有餘跡。流芳未及歇、遺挂猶在壁。悵恍如或存、周遑忡驚惕。如彼翰林鳥、雙栖一朝隻。如彼游川魚、比目中路析。春風緣陳來、晨雷承檐滴。寢息何時忘、沈憂日盈積。庶幾

有時衰、莊缶猶可擊」(『文選』卷二三所収)に倣った詠い方である。

(22) 「古詩八首」其一の第一、第二句(『玉臺新詠』卷一所収)。

(23) 唐・張紘「閨怨」詩「去年離別雁初歸、今夜裁縫螢已飛。征客近來音信斷、不知何處寄寒衣」(『全唐詩』卷一〇〇所収)もその一例である。

(24) そのような女性の一例としては、唐・上官昭容を採り挙げて論じている拙論「上官昭容(婉兒)詩小攷―初唐、景龍年間の応制詩群からの考察―」(『二松學舎大学人文論叢』第八十四輯、二松學舎大学人文学会、二〇一〇年三月)を参照されたい。

(25) このような名媛と言われた、著名な文人の妻や妹等であった女性詩人は漢代から六朝期には多くいた。例えば、後漢の蔡邕の娘の蔡琰、同じく後漢の秦嘉の妻の徐淑、晋の左思の妹の左芬、宋の鮑照の妹の鮑令暉、梁の沈約の孫娘の沈滿願(范曄の妻でもあった)、同じく梁の劉孝綽の妹の劉令嫺(徐悱の妻でもあった)等はその一例である。

(26) 諸田龍美「中唐における艶詩の流行と女性―元白の艶詩の流行と女性を中心として―」(『中国文学論集』第二十四号、一九九五年)四四〇四五頁。

(27) 魚玄機の詩が知名の士の間で名声を得ていたことは、『三水小牘』卷下に、「魚玄機」喜讀書屬文、尤致意於一吟一詠。破瓜歲、志慕清虛。咸通初、遂從冠帔於咸宜、而風月賞翫佳句、往往播士林」と記されている。